

招致の経緯

1980年代から1990年代にかけて、日本人にとって身近な国際大会であったAPOC（アジア環太平洋選手権）も、マスターズの登場などで、ヨーロッパや北米の参加者が激減した。おりしも、中国をはじめとするアジア諸国でのオリエンテーリングが少しずつ興隆し始めた。そこで、APOCが発展解消する形で、2008年よりアジア選手権が生まれた。アジア選手権は、IOFの地域選手権構想の一翼を担いながらも、アジア地区の発展の現状をふまえて、ジュニアからマスターズまで、全てのクラスを対象とする大会として生まれた。

前回の韓国に続く大会が、韓国大会の時のアジア地域会議で承認され、第二回アジア選手権への準備が始まった。

準備の概要

大会招致決定後、JOA各会員への大会打診の結果、世界選手権による地図の資産もある愛知、その隣県である岐阜が開催地として決まった。岐阜ステージでは岐阜県協会とOLCルーパーが、愛知ステージでは愛知県協会が管理者として大会を準備することとなった。

大会全体を総括する総務部門にはJOAの村越が、また競技部門の統括には前回韓国大会の事実上のまとめ役となった寺嶋氏があたることになった。また、競技の要の一つであるITには、世界選手権以来数々の国際大会を成功に導き、前回韓国大会でも韓国の若手を統括して成績集計面を成功させた的場氏を中心とするITチームが当たった。いずれも韓国大会の盛り上がりを見て、この大会が今後とも末永くアジアのオリエンティアの交流の場となることを期待しての準備参画であった。

正直なところ、6回の国際大会に関わった私としても、これまででもっとも辛い準備期間であった。ITを担当した的場氏、またスキーオリエンテーリングの世界選手権に引き続きエントリーを担当した清水さんも同様の印象を漏らしていたから、その印象は単に主観的なものではなかったのだろう。

その要因はいくつかある。最大の要因は、情報提供単位の多さである。世界選手権でも参加数は400人弱だが、情報提供単位は基本的には連盟なので、たかだか20程度である。今回は、その

数十倍の情報提供単位があった。また参加者は4日間競技に参加し、複数のランクの宿に泊まり、様々な参加形態で大会に関わる。総務部門の人材不足から、要項やプログラムを見切り発車的に発行したことによる情報不足からくる問い合わせや申し込み不備もあった。

今後の国際大会開催のためにも、競技エントリーから輸送・宿泊といったロジスティックまで、いかにシンプルに大会を運営するかは、避けて通れない問題だろう。

大会概要

ふたをあけるまで全く分からなかった海外参加者も、中国の100名を越える参加のおかげで、200名を越えた。国内からも最大600名のエントリーがあった。スプリントでは約500名、ミドルで約750、ロングで約800、リレーで約550の事前エントリーがあった。連休中の複数日大会であることを考えれば、まずまずのエントリー数だったと言えるだろう。

中でも目立っていたのは、中国と香港のジュニア層である。国内では普段1-2名しか出場しないクラスでも、中国や香港の選手が数多く参加した。大会のにぎわいは、ジュニアにとっても思いつきに出るものになったに違いない。

選手権クラスを見ると、シニアでは男子の日本、女子の中国という構図が明確であったし、ジュニアでは逆にエントリー数が少ないながらも、中国のリ・シャンの大活躍が目立った。女子シニアでは、シドニー五輪の10000m入賞者であったリ・ジがスプリントとロングを制し、一方、ミドルではリ・フェイが優勝し、上位3名のほとんどを中国勢に占められた。一方男子では、日本勢が表彰台をほぼ独占状態であったが、ジュニアではリ・シャンに3冠を許した。

最終日には、中国オリエンテーリング協会のフ事務局員が、次回2012年10月に開催されるチャンスー（江蘇）省ウーシ（無錫）市での大会への歓迎メッセージを読み上げ、大会の幕が閉じられた。なお、同大会開催地のウーシ市は現在万博で盛り上がる上海から内陸に約100kmほどの場所で、会期は10月20日から24日となる。また第4回

にはカザフスタンが立候補を表明している。

アジア選手権の意義と課題

当初、今回の海外選手参加数は100名程度と予想したが、実際にはそれを大きく上回る200名以上の参加があった。何より中国からの参加が100名を越えていたことは驚きであった。アジアのオリエンテーリングが徐々にではあるが発展しつつあることを肌で感じる大会であった。

彼らは大会に参加するだけでなく、その一部は休養日のセミナーに参加し、地図作成、エリートの強化、普及など様々な問題で情報と意見を交換した。ヨーロッパに自由に出かけることの少ないジュニア選手にとっても、国外の選手を意識するまたとない機会になったことだろう。そのような身近な場としてのアジア選手権は、今後のアジアでのオリエンテーリング発展に不可欠の場であることが、今回のアジア選手権では確認することができた。

一方、課題も多い。参加者の多くはまだ国際大会の出場に慣れていない。要項やプログラムの読み込みについても不十分である。大会に安心して参加でき、混乱のない運営が行われるためにも、各国においてグローバルスタンダードな運営と大会参加が行われるようになることが必要であろう。また、日頃からの競技、運営両面での協力関係をより広くかつ深く続けていくことがアジア地区の発展のためにも、アジア選手権の継続のためにも必要だと思われる。（村越 真）



表彰台を独占した日本の男子シニアチーム（上）と、女子で上位を独占した中国チーム（下）